

研究室の窓から



子どもの発達を考える

内山伊知郎

昨年から今年にかけて気候が不順で、京都には珍しく暖かくあまり雪のない冬であった。今春から滞在しているカリフォルニア州バークレーでは、例年に比べて二倍近い降水量で、陽差しの少ない寒い春を過ごしている。他方、テレビでは東海岸の雷や竜巻の害による悲惨な映像が報じられている。丘陵地にある自宅に入居したとき、雨による被害から守るた

めに裏庭はピニールカバーでしっかりと覆われていた。オーナーはエルニーニョ現象が四月末に治まるからそのときカバーを外すと説明してくれた。このように世界中で起きているさまざまな異常気象と、東部熱帯太平洋の海面水温が上昇するエルニーニョ現象の関係が見いだされ、われわれはこのような天候異変を科学的に理解し、対応することができるようになっている。

我ら人間の心理も非常に複雑に見える。心理学の研究者はこの複雑な様相を単純なメカニズムで説き明かそうと長年努力してきた。そのなかでヒトは生まれながらにして生得的に発達プロセスが規定されているのか、あるいは誕生後の生活環境によって発達が規定されるのかは、教育の問題とも相まって重要なテーマである。昨今の早期教育もこの議論が大いに関係していよう。

しかし、この議論はおそらく百年にわたって議論されてきたが結論がでていな

いようである。心理学の歴史は百二十年近いがその中で学説の流行によって考え方が変化しているようである。アメリカで一九二〇年代に隆盛を極めた行動主義の時代には、動物を対象とした条件づけが研究の中心であった。条件づけを行うと、ラットや犬でもかなりの行動を学習することが出来る。そのため、その大御所であり、子どもの発達研究にも大きな影響を及ぼしたワトソンという研究者が、誕生後の環境によって子どもの発達はどうのようにもなると唱え、環境が重要であると考えられるようになったようである。

その後、一九八〇年代に、ヒトはサルから進化したと考える進化論を唱えたダーウインが没後百年を迎えた。それを記念した多くの出版物が書店に並んでしばらく後、アメリカの心理学会で、エックマンというカリフォルニア大学サンフランシスコ校の研究者が表情の生得性についての研究で学会賞を受賞している。彼

は日本にも訪れ、書物が翻訳されたこともあって、心理学の世界では有名な研究者の一人である。ダーウインが「ヒトと動物の表情について」という書物の中で、まだ西洋文明にふれていない未開社会の人々の笑顔が西洋文明の人々の笑顔と同じであるということ、そして動物の怒った顔と乳児の怒った顔が同じであることなどを理由に、表情は生得的であると説いている。エックマン先生はこの考え方を実験や調査によって確認し、さらに笑顔を作るといつでも楽しくなる可能性を示唆して、その業績が評価されたのである。心理学の中に、ヒトの発達の生得的な考え方が優勢になってきているように感じる出来事である。

さて、先日カリフォルニア大学バークレー校のキャンボス先生が最近取り組んでいる乳児の研究について大学内で講演会を開いた。夕刻で、天候も悪く参加者は少人数であったが、そこにエックマン先生も仲間を連れて訪れ、その会の司会

をされた。キャンボス先生の主張は、乳児が「はいはい」をするようになり移動を経験すると認知発達に影響が及ぼされるというものである。これは能力の生得的な発達観に新たな問題を提起する考え方である。すなわち、人間の発達プロセスは生得的ではなく、誕生後の経験に左右されるといって考え方であるので、どうもエックマン先生たち聴衆にすつきりと了解されずに、いろいろな質問が飛び出した。講演会の後、中華料理店で円卓を囲んでも、中華料理の味付けのようなホットな議論がひとしきり続いた。夕食後、まだ車をもたない筆者をキャンボス先生が送ってくださる車中で、どうも今日はまだ十分に理解されていないなあとおぼやいておられた。しかし、考えて見ればかなり立場の異なる聴衆であったので、それも無理はないと思えるのだが…。

このようにさまざまな心理理論が交錯して次々と提案され、おそらく人間の理解を深めていくのであろう。しかし、ま

だまだ人の心には謎が多すぎる。あたらないといわれる天気予報の方が余程よく解明されている。筆者も言葉を話さない乳児の気持ちを理解するために、こしばらばらキャンボス研究室で勉学生活を送りたい。

うちやま・いちろう

同志社大学・文学部

